HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	三巻本『枕草子』不審本文考（三）
Author(s)	後藤，康文
Citation	北海道大学文学研究院紀要，158，19(右)-38(右)
Issue Date	2019-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.158.r19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75216
Type	departmental bulletin paper
File Information	158_06_Goto.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/bfhhs.158.r19

三巻本『枕草子』不審本文考（三）

後藤康文

十

【本文】「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」の段

かかる者はうちうんじたるこそあはれなれ、うたてもはなやぎたるかなとて、「こと物は食はで、ただ仏の御おろしをのみ食ふ。いとたふとき事」など言ふけしきを見て、「などかこと物もたべざらむ。それが候はねばこそ、とり申せ」と言ふ。

（第八十三段・一五二頁二行～六行）

【三巻本諸注の解釈】

・取り申しつれ／お下がりをねだつているのですの。（『評釈』本文／通釈）
×取り申しつれ／おさがりを頂くのですよ。（『大系』本文／頭注）
×取り申しつれ／仏さまのお下りを頂くのでございますよ（『全講』本文／文意）
×取り申せ／（やむをえず）仏さまのお供えのおさがりをいただくのです／「仏の御おろしを取り申せ」のこと。（『旺文社文庫』本文／現代語訳／脚注）
×とり申しつれ／しかたなく、お願い申し上げたのです／一類「申」（まうせ）。二類による。能因本「申し侍れ」。（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）
×とり申せ／（おさがりを）頂戴するのですわ／▼申す　この動詞マウスは、イフ・ツグ等の謙譲語ではない。ネガフ・コフ等の原義で用いられている。（『解環』本文／口訳／語釈）
×とり申せ／東本「とり申つれといへば」、能本「とり申侍れといへば」。（『和泉古典叢書』本文／頭注）
×とり申／もらうことを「とる」と言ったもの。（『新大系』本文／脚注）
×おさがりを取り申すのでございます／不審。一説、「とりはみ」（鳥食み・取り食みの両説がある）の「取り」の意とする。「とりはみ」は宴会の料理の残り物などを庭に投げて下人などに食べさせること。また、それを食う者。底本表記「とり申」。（『新全集』現代語訳／頭注）
・取り申（し）つれ／御供物をおろして下さい／一類本「取り申せ」。（『全訳注』本文／現代語訳／語釈）
・とり申しつれ（『新編』本文）

【批評】

ここで問題になる「とり申す」という語は、

・源少納言さぶらひたまはば、対面して事の心とり申さん

（『源氏物語』明石巻／新編日本古典文学全集②・二三〇頁一四行～一五行）

・「とり申すべきことありてなむ」と言はす。（同東屋巻／同⑥・二五頁一三行～一四行）

のごとく、「ある事案や話題を取り上げて申し上げる」の意か、そうでなければ、

・そもそも女は、人にもてなされて大人にもなりたまふものなれば、くはしくはえとり申さず、かの祖母に語らひはべりて聞えさせむ（同若紫巻／同①・二一四頁八行～一〇行）

・いかでこの辺のこと伝へつべからん人もがなとのたまはせしかば、さるたより知りたまへりととり申ししなり。（同東屋巻／同⑥・二三頁一四行～一五行）

・これ、ただ、うしろやすきことをとり申すなり。（同／同・三〇頁八行～九行）

のように、「ある事案や話題を取り計らって申し上げる」の意にしかならない。したがって、これまでのその場凌ぎの解釈はすべて誤りだと断定してよい。

なお、『新大系』の傍線部「もらうことを「とる」と言った」との見解は、おそらくこのあとの場面に、

・「いとほし。これに、何取らせむ」と言ふを聞かせたまひて、「いみじう、かたはらいたき事はせさせつるぞ。え聞かで、耳をふたぎてぞありつる。その衣一つ取らせて、とくやりてよ」と仰せらるれば、「これ、給はするぞ。衣すすけためり。白くて着よ」とて、投げ取らせたれば、伏し拝みて、肩にうち置きて舞ふものか。

（一五三頁一行～六行）

とあるのを直接の根拠とするものであろうが、「取らす」→「取る」の図式がこの場合はたして成り立ち得るのか、はなはだ疑問。老女法師「常陸の介」が当初「とり申」したのは「仏の御おろし」であったが、その卑猥な歌舞を嫌悪した中宮が彼女を追い払うために「取らせた」品は、結果的に「衣一つ」だったわけだから。さらに、『解環』の「申す」の語釈に至っては、もはや寝言の域に突入している。

【本文改訂案】

そこで、提案が一つ。それは、「とり申せ」の「とり（止利）」を「こひ（己日）」の誤写とみて、「ねだる・求める」といった意を表す動詞「乞ふ」の連用形と解するアイデアである。すると、傍線部本文は、

◎**乞ひ**申せ

〔おねだり申し上げるのです〕

に変貌を遂げ、従来の不審がたちどころに解消されることになるのだ。【批評】欄で触れた下文の「取らす」との照応について付言するなら、たとえば、『万葉集』の歌、

・苞もがと乞はば取らせむ貝拾ふわれを濡らすな沖つ白波　（巻第七・一一九六）

などの例が端的に物語るように、適切至極といえる。ここで成立しているのは、「取る」→「取らす」ではなく、「乞ふ」→「取らす」の関係なのである。また、「申す」はあくまで通常の用法で、謙譲の補助動詞以外の何者でもありえない。

最後に、『枕草子』の中から動詞「乞ふ」の用例を念のため拾っておこう。

・清げなる硯引き寄せて、文書き、もしは鏡乞ひて、見なほしなどしたるは、すべてをかし。
（「うちの局」の段／第七十三段・一二九頁七行～九行）

・ものうらやみの中将、宰相に子生ませて、かたみの衣などこひたるぞにくき。
（「物語は」の段／第百九十九段・三三七頁一行～三行）

・ちごの祈りし、腹などとる女。物の具どもこひ出でて、祈り物作る
（「さかしきもの」の段／第二百四十一段・三七三頁一一行～一二行）

【参考】

〔三巻本本文〕とり申と（陽明宮高富）―とり申つれと（中本勧弥刈徳日内早宇古前河静龍）
〔能因本本文〕とり申侍れと（学富）

十一

【本文】「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など」の段

おもののをりになりて、御髪上げまゐりて、蔵人ども、御まかなひの髪上げて、まゐらするほどは、へだてたり

つる御屏風も押しあけつれば、かいま見の人、隠れ見の人隠れ蓑取られたる心地して、あかずわびしければ、御簾と几帳との中にて、柱の外よりぞ見たてまつる。（第百段・二〇三頁六行～一〇行）

【三巻本諸注の解釈】

○かいま見の人、かくれ蓑取られたる心地して／のぞき見をしていた私は、まるで隠れ蓑を奪われたような感じがして（『評釈』本文／通釋）

○かいまみの人、隠れ蓑とられたる心地して（『大系』本文）

○かいまみの人、隠れ蓑取られたる心地して／のぞき見のわたしは、隠れ蓑を取られたような感じで（『全講』本文／文意）

×かいまみの人、隠れ蓑人、隠れ蓑取られたるここちして／のぞき見をしていたわたくしは、隠れ蓑人が隠れ蓑を取られたような気持がして（『旺文社文庫』本文／現代語訳）

○かいま見の人、隠れ蓑取られたるここちして／覗き見をしていた私は、まるで鬼が隠れ蓑を取られたような恰好になって／鬼の隠れ蓑。拾遺集、巻十八「隠れ蓑隠れ笠をも得てしがなきたりと人に知られざるべく」。一類「人かくれみの」重複して衍。削る。（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）

○かいま見の人、かくれみのとられたる心ちして／覗き見をしている人（即ち私）は、隠れ蓑をとられたような気分がして（『解環』本文／口訳）

×かいま見の人、隠れ見の人隠蓑取られたる心地して／隠蓑をきて、隠れて見ている人がその蓑を取られたような

気持で、の意。東本、能本、前本「隠れ見の人」なし。　（『和泉古典叢書』本文／頭注）

○かいま見の人、隠蓑とられたる心ちして／底本このあとに「かくれみの人」の衍。二類本により除く。

（『新大系』本文／脚注）

×のぞき見の人であるわたしは、隠れ見をしている人が隠れ蓑を取られた気持がして／重なるが、仮にこのままにしておく。二類本・能本「隠れ見の人」ナシ。　（『新全集』現代語訳／頭注）

○かいまみの人、隠れ蓑取られたる心地して／覗き見している人は隠れ蓑を取られた思いで

（『全訳注』本文／現代語訳）

○かいま見の人、隠れ蓑取られたる心地して　（『新編』本文）

【批評】

三巻本の最善本とされる第一類陽明文庫本の本文を尊重する注釈書は右のとおり少数派であって、多くが、同二類本・能因本等の形を是として改訂・採用している（『全訳注』は底本自体が第二類弥富本）。そのような状況下にあって、『解環』は、

（上略）果たして、三巻本第一類(a)本文が正しいか、その他の諸本の(b)本文が正しいか、判断に窮するところである。

たしかに、系統別多数決の原理を適用すれば、(b)本文が優位に立ち、(a)本文は、近接重出する類似の言葉に幸制されての書写意識の後戻りによる衍加と説明することが出来るが、「垣間見の人（清少納言）」は、まるで、「隠

れ蓑人（伝説中の透明人間）」が「隠れ蓑」を取り上げられて本体を暴露した時のようなはしたない気持になったということを、片言洩らさず克明に叙述すれば、当然(a)本文に見るだけの用語表現が必要となり、その用語の繰り返しにむしろ、文章のリズム感をさえ持たせたということも出来よう。しかし一方、簡勁犀利、むだな言葉遣いを極度に避ける清少納言の文体の特徴とは一致しない。隠れ蓑を取られたとさえいえば、その取られた人物が「隠れ蓑人」であって、余人ではないことは自明であるからである。

要するに、低部批判の段階における、本文衍加の可能性と系統別多数決の原理及び、高部解釈における清少納言の文体という個性的規準とよりして、(b)本文を採用した次第である。（解環）

と述べて、結論に到達するまでの過程を明らかにしているのだが、さてどうであろうか。

【本文改訂案】

すでに明白なところだが、当該本文は多数派の判断どおり、

◎かいま見の人、隠れ蓑取られたる心地して

〔垣間見をしている人（誰あろうこの私）は、（まるで）隠れ蓑を剥奪された心境で〕

でなければならない。三巻本第一類祖本書写者の筆が「かいまみの人かくれみの」まできたとき、「みの」の重出に惑わされて、「人かくれみの」の部分を再度書き写してしまったケアレスミスに過ぎないのである。だから、このケースはどちらの「本文が正しいか、判断に窮するところ」ではありえず、「高部解釈における清少納言の文体という個性的規準」（以上『解環』）などまったく無関係であること、いうまでもない。

【参考】

〔三巻本本文〕かくれみの人（陽明宮高富）―ナシ（中本勧弥刈徳日内早宇古前河静龍絵）

〔能因本本文〕かひま見の人かくれみのとられたる心して（学富）

十二

【本文】「宮にはじめてまゐりたるころ」の段

宮にはじめてまゐりたるころ、物のはづかしき事の数知らず、涙も落ちぬべければ、夜々まゐりて、三尺の御几帳のうしろに候ふに、絵など取り出でて見せさせたまふを、手にてもえさし出づまじうわりなし。「これはとあり、かかり。それか、かれか」などのたまはす。

（第百七十七段・三〇六頁八行～一二行）

【三巻本諸注の解釈】

×手にても／手でさえも／「手にても」は、手で受け取るのでさえもの意。（『評釈』本文／通釋／頭註）

×手にても／手でさえさし出せない程たまらなく恥かしい。「手にても」は不審。能因本・前田本「ても」。（『大系』本文／頭注）

×手にても／手さえ／「手にても」は不審。能因本・前田本は「ても」（『全講』本文／文意／釈義）

×手にても／手さえも／手さえも前へ出すことが出来ないほど。「手にても」は「手だも」「手も」などの誤りか。
能因本・前田本には、「にて」なし。前田本には次の「え」もない。（『旺文社文庫』本文／現代語訳／脚注）
△手にても／それに手も／やや不審。あるいは「だにも」の誤写か。能因本、前田本「たまふをだに（前田本「え」）
ても」。（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）
×手にても／（得意な）筆跡であってもうっかり口出しできそうもないほどで、困ってしまう。
（『解環』本文／口訳）
×手にても／手の部分だけでも、几帳の内へついて寄ることもできないほど困ってしまう。
（『和泉古典叢書』本文／頭注）
×手にても／「手にても」は、手ごときものであってすら、の意であろう。手をさし出すというごときことすら、
と言うのと同じ。（『新大系』本文／脚注）
×それに手でさえも／「手にても」はわかりにくい。手であってすらも、と仮に見る。能本「手も」。一説、「手」
を筆跡と見て「絵ではなく得意の筆跡鑑定であっても」の意とする。この特技が、女房として作者を招いた一因
となったと見る考えに基づく。（『新全集』現代語訳／頭注）
・手にても／（それに）手も（『全訳注』本文／現代語訳）
×手にても／手でさえも前に進み出て応じられない。（『新編』本文／脚注）

【批評】

一見簡単そうだが実は難解な箇所で、三巻本諸注も「手」を焼いてきた様子がありありと見て取れる。だがだからといって、傍線部「手にても」の「にても」に、「（で）さえ」「（で）さえも」など「だに」と何ら選ぶところのない訳語を当てて済ませるのは、いくら窮余の策とはいえ紛れもない誤りである。

ならばいっそのこと、「にても」を「あるいは「だにも」の誤写か」（『角川文庫』）と疑ってみるのも一つの「手」であり、「たに」から「にて」への本文転化の可能性はなきにしもあらずだとは思うけれども、字母の特定が必ずしも容易ではないこともあって、積極的に推すのはやはり躊躇される。

なお、無駄な引用は省略するが、『解環』がその正当性を強く主張する「手」＝「筆跡（鑑定）」説は珍説の典型というべきもの。失礼ながらこれには失笑を禁じえない。スリルとサスペンスを求める向きは、是非同書を参照されたい。

【本文改訂案】

では、どう考えるべきか。答えは、ほぼ間違いなくこうであろう。つまり、三巻本の現本文「手にても」は、元来別個の二成分「手にて」と「手も」が、不用意な書写行為により融合してしまった混成本文であると。要するに、もとは「手も（毛）」とあった原本文が、ある段階で「手にて（二天）」に誤られ、この形をいぶかしんだのちの写し「手」が、推測または校合の結果として「にて」の横に「もヵ」「もィ」などと書き入れた。そして、その注記が抹消されないまま残った誤謬本文に接続して、「手にても」の異形を今日に留めることになったというわけだ。したがって、傍線

部本文は、能因本や前田本と等しい形、

◎手も

〔手も〕

に改訂されねばならないのである。

【参考】

〔三巻本本文〕手にても（陽明宮勧高富本中弥徳烏日内早古前河岸伊静）―手にも（宇）

〔能因本本文〕ても（学）手も（富）

十三

【本文】「五月の菖蒲の、秋冬過ぐるまで」の段

五月の菖蒲の、秋冬過ぐるまであるが、いみじう白み枯れてあやしきを、引き折りあけたるに、そのをりの香の残りてかかへたる、いみじうをかし。

（第二百十四段・三五一頁三行～五行）

【三巻本諸注の解釈】

×引き折りあげたるに／へし折つて取り上げて見ると／上ぐ、または開く意か。（『評釈』本文／通釋／頭註）

×ひき折りあげたるに／引き折ってとり上げたところ。（『大系』本文／頭注）

×引き折りあげたるに／ひき折つてとり上げたところ（『全講』本文／文意）

×引き折りあけたるに／折り取って来て、ひろげたところ／「あけ」は「上げ」とも考えられる。（『旺文社文庫』本文／現代語訳／脚注）

×ひきをりあけたるに／折った着物をあけたところ／やや解しがたい。「ひきをる」は着物を二重に折る、と解すべきであろう。折った着物の間にはさまっていたのを開ける、と試解する。（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）

×ひきをりあけたるに／ポキポキ折り取って中身（の匂袋）を取り出したら／又、中宮御殿のことと限らず、一般家庭においても菖蒲の薬玉は毎年調製するのだから、それが、秋冬を過ごすまで、残骸を曝しているということも大いにあり得ることである。その白み枯れてみっともなくなってしまった薬玉の、縛ってある菖蒲の枯葉をポキポキと折って、中身をひき開けると、そこからは、薬玉の芯として包みこんであった匂袋が出て来る。匂袋も、半年以上放置されてあったのでは、さほど香気は高くないが、それでも、五月節供の頃の残り香が懐かしく漂うことであろう。（中略）匂袋を解剖するまでもなく、菖蒲の枯葉をひき折って、匂袋を取り出したと見るべきであろう。／▼五月のさうぶ　ゴグヮチとよむ。五月の節供に、帳台の柱や几帳の手などに結びつけておいた菖蒲の薬玉。屋根に葺いた菖蒲や菖蒲の輿・菖蒲蔭などではあるまい。それらには、「引き折り開け」という動作が適当しないし、中から香気が漂い出ることもないからである。（『解環』本文／口訳／解環／語釈）

×ひき折りあけたるに／根もとの部分を折ってあけること。あるいはここは、薬玉のことか（三六段参照）。

（『和泉古典叢書』本文／頭注）

×ひきおりあけたるに／わかりにくい表現だが、次段に同様の言葉遣いがあって、それと同義であろう。だとすれば、両段とも「ひきあけ」で、本段は菖蒲であるが故に「をり」を介入させたものと思われる。そうであれば、「ひきあけ」る菖蒲とは、五月の薬玉だということになる。ただし、「秋冬すぐるまである」というのとは、うまく調和しない。

（『新大系』本文／脚注）

×引っぱって折って開けたところ／「折りあけ」不審。仮に菖蒲を「引き折りあけ」たと見るが、「引き折りあげ」とすることもできる。入れものを開けた、とするなら「薬玉」のことか。一説、引き折ってどこかに入れておき、その入れものを開けたの意とする。また一説、「引き折る」は着物の間にはさまっていたのを開けるの意。

（『新全集』現代語訳／頭注）

×引き折りあけたるに／引き折って開けてみると／「引き折りあけ」の解釈は、諸説あって確定しないが、次段に見える「引きあけ」の解釈とも深くかかわってこよう。大きくは「引き折り開け」か「引き折り上げ」かに分かれ、それぞれについて、さらに説が分かれる。「あけ」とする説には、引き折ってどこかに入れておき、その入れものを開けたの意とするもの、また、折ってあった着物の間に挟まっていたのを開けると試解する角文説もある。解環は「薬玉」のこととする。「あげ」ととれば、取り上げてみると、と解せるか。なお、薬玉は麝香、沈香などの香を細かくし、練って玉にした上で袋に入れ、糸や造花で飾って菖蒲・蓬を結び、五色の糸を下げて簾や柱、また身につけて邪気を払うまじないとしたもの。ただ、「薬玉」であれば、それをわざわざ「菖蒲の」と書き始め

た理由がわからない。　（『全訳注』本文／現代語訳／語釈）

×引き折りあけたるに／▼菖蒲　「薬玉」は重陽まで残らず（三七）、その語も無いので、屋根に葺いた菖蒲か。▼引き折りあけ　引きぬいて開く意か。菖蒲の残り香。　（『新編』本文／脚注）

【批評】

御覧のとおり注釈の現状はアナーキーともいうべき大混乱で、収拾不可能な様相を呈している。「やや解しがたい」（『角川文庫』）、「不審」（『新全集』）といった〝悲鳴〟があがるのももっともな話で、傍線部本文中の「引き折りあけ」は、このままではとうてい解釈不能な転化本文でしかありえない。だから、これをまともに相手にしているかぎり、所詮は不毛な議論に陥って、蝸牛角上の争い、目糞鼻糞を笑う結果に終始するのも当然の帰結であったわけだ。ゆえに、右に提示された諸説をいちいち取り上げて批評することは、ほとんど意味がない作業なので省略する。

【本文改訂案】

結論から述べるならば、本節傍線部本文は、

◎引き折りたるに

〔二つに折ったところ〕

に改めるのが妥当と判断する。それが今の形になった原因は、「引き折り」と「引きあけ」両語の無造作な一体化にあったとみられる。すなわち、もとは「引き折り」と書かれていた「折り」の部分に、「あけヵ」などのさかしらな傍記が

なされ、本文化した形が今に伝わる「引き折りあけ」だということ。そして、そのような「傍記」をことさらに促した〝犯人〟が、『新大系』や『全訳注』に言及（二重傍線部）のある直後の章段、

よくたきしめたる薫物の、昨日、一昨日、今日などは忘れたるに、引きあけたるに、煙の残りたるは、ただ今の香よりもめでたし。（「よくたきしめたる薫物の」の段／第二百十五段・三五一頁九行～一一行）

の「引きあけ」であったことは容易に想像がつくであろう。とんだ不覚をとったその書写者には、ほんの少しあとに現れる似通った表現までもが、自然と視界に入っていたに相違ないのだ。

ところで、「引き折る」という使用頻度のきわめて低いことばの意味だが、「引き」はいわゆる接頭語であって、実質「折る」というに等しいといえよう。五月五日に使用した菖蒲の葉の余りが屋内の片隅にでも放置されていて、すっかり枯れ果てて白く変色しているのをふと二つに折ってみたところ、いまだ節供の折の香気が残存していてあたりに漂ったのだと、そのように読んでおきたい。この「菖蒲」が、「折った着物の間にはさまっていた」（『角川文庫』）ものでも、「薬玉」（『解環』）でも、「屋根に葺いた菖蒲」（『新編』）でもないこと明白だと思うのだけれども、さてどうであろうか。

【参考】

〔三巻本本文〕異同ナシ

〔能因本本文〕引おりあけたる（学）引おりかけたる（富）

十四

【本文】「社は」の段

この親は上達部などにはあらぬにやありけむ、中将などを子にて持たりけるは。心いとかしこう、よろづの事知りたりければ、この中将も若けれど、いと聞えあり、いたりかしこくして、時の人におぼすなりけり。

（第二二七段・三六二頁七行～一一行）

【三巻本諸注の解釈】

×上達部などにはあらぬにやありけむ／上達部どころの器ではなかつたのであろう／上達部程度でなくもつと高位の人であつたらしい。流布本「上達部などにやありけむ」のほうが意が通じやすい。

（『評釈』本文／通釋／頭註）

×上達部などにはあらぬにやありけん／公卿などではなかつたようだが、よくも中将などを子として持ったものだ。能因本「上達部などにやありけん」。

（『大系』本文／頭注）

×上達部などにはあらぬにやありけむ／公卿などではなかつたようだが／能因本に「上達部なとにやありけん」とあり、それによれば、次の「中将などを云々」は倒置法となる。三巻本によれば、「……ありけむを」の意と解さ

れ、「持たりけるは」の「は」は詠嘆の意となる。（『全講』本文／文意／釈義）

×上達部などにはあらぬにやありけむ／上達部などではなかったのであろうか／下の「中将などを子にて持たりけるは」の句へ逆接的な気持ちで続く。能因本・前田本「上達部などにやありけん」。（『旺文社文庫』本文／現代語訳／脚注）

×上達部などにはあらぬにやありけむ／上達部などではなかったのかも知れない／同右〔＝能因本・前田本〕「には　あらぬ」なし。（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）

×かむだちめなどにはあらぬにやありけむ／上達部なんかではなかったのでしょうが（『解環』本文／口訳）

×上達部などにはあらぬにやありけん／能本、前本「にはあらぬ」の部分なし。（『和泉古典叢書』本文／頭注）

×上達部などにはあらぬにやありけん／七十近い人の子が中将、という所を見ると、この親は上達部ではなかったのだろう、の意。（『新大系』本文／脚注）

×上達部などではなかったのだろうか／七十近いのに、子供が中将というのでは親は上達部ではなかったのだろう、と推定する。能本「上達部などにやありけむ」。（『新全集』現代語訳／頭注）

×上達部などにはあらぬにやありけん／上達部ほどの身分ではなかったのだろう（『全訳注』本文／現代語訳）

×上達部などにはあらぬにやありけむ（『新編』本文）

【批評】

二重傍線部から顕著にうかがえるように、多くの注釈書が三巻本本文に違和感を覚えているようだ。まことにその

とおりなのであって、本節傍線部本文は、以下の文章とまったく調和しない奇妙な姿を、恥ずかしげもなく露呈しているのである。となれば、諸注の間で食い違いが見られる下文への接続関係に対する理解等について、無駄な検証を試みる必要とてなかろう。そもそもの基盤に狂いがあるとすれば、それに則ろうとする解釈にはもはや何の意味もないからだ。

【本文改訂案】

ここは、

①二種の異文「にはあらぬ[にや]」と「[にや]ありけむ」とが、校合の折などに連結融合してしまった。

または、

②元来能因本・前田本と同じく「にやありけむ」とあったところへ、書写者の誤った解釈が介入して「にはあらぬ」の五文字がその上に挿入された。

の、いずれかの事情によって三巻本系の歪んだ本文が誕生するに至ったのだと、そう推理するのが適切だろう。両者を比較すれば、①よりも②の可能性の方が大きいと思うが、どちらの過程を経たかにかかわらず、〝復元〟本文は、

◎上達部などにやありけむ

〔高位の貴族だったのだろうか〕

となるのであって、この点疑う余地は毫もない。

なお、傍線部本文の下文への接続関係について述べるならば、間違いなく順接である。すなわち、

※〔親が上達部である〕∴〔子が中将である〕

という叙述の論理を、われわれは正確に読み取らねばならないのだ。「この中将も若けれど、いと聞えあり、いたりかしこくして、時の人におぼすなりけり」の部分における、圏点を付した添加の係助詞「も」の使用は重要で、その機微は敏感に弁えられねばならない。父がひときわ秀でた公卿であったからだろうか、その息子も若くして近衛府の次官にまで昇りつめた才人であって、世評も帝寵もともに他を圧倒する逸材だったという文脈なのである。

【参考】

〔三巻本本文〕あらぬにや（陽勧中弥刈徳烏日内早宇古前河鈴京伊静）―あらぬかや（明宮天高富本）

〔能因本本文〕上達部なとにやありけん（学）上達部なとにや有けん（富）